**読書ノート　その27**

2019年2月17日　小林

以下の三点の論文はいずれも、「民族学研究」（1950年5月）に和辻論文とともに掲載された「菊と刀」の書評です。

1. **「菊と刀」－評価と批判（東大教授・法社会学者・川島武宜）**

* 著者は一度も来日していないのに日本人の精神生活・文化に深く鋭い分析をしたのは驚嘆に値する。本書はすべての日本人が読むべき。もともと日本の社会科学は思弁的傾向が強いが本書は実証的な豊富な資料による裏付けがなされている。本書を読んだ多くの日本の学者は資料の豊富さに驚嘆した。
* 階層制Hierarchyについての分析は鋭く視野が広大、ただし疑問に思う点二点あり。以下省略。
* 「恩」と「義理」が日本の社会結合の原理として重要であることを著者が認識していたことについて深い敬意を払うものである。しかし、疑問点あり。以下省略。
* 「人情」に関する第九条は教訓に満ちているが、問題の中心からずれている。仏教における現世的な快楽の否定や肉体の価値の否定が日本人には見られないのに、一方で日本の道徳が極端な義務の履行と徹底した自己放棄を要求しているのは矛盾すると著者は言うが、これは歴史的に見れば一般庶民の道徳と武士階級の道徳が完全に融合せずに並存しているから。著者には歴史的な観点が欠けている。
* 「修養」に関する第十一章は、日本人にとってあたりまえのことが決してあたりまえでないことを示す点で多くの日本人を驚かすであろう。日本人にとっての修養の本質を自己犠牲・自己抑制を意識させないようにする努力と理解した著者の分析には、敬意を表する。修養において無我の境地を要求し、「死んだつもり」になることを要求することがおこなわれているが、これは著者が言う封建制に根ざしたものというよりアジア社会特有のものではないか。以下省略。

1. **「菊と刀」のくに－外国人の日本観について（早大教授・歴史学者・津田左右吉）**

* 著者が日本を学問的方法で研究したことが分かり、単なる思いつきや感想を述べたものでないことが知られる。問題は、根拠となる資料を何からどう取ったかという点にある。現在の日本人の生活の営みは、歴史の中で何度か大きな変化がありそれらが混在し絡み合った結果としてある。これを著者は考慮していない。その他いくつかの難点あり。省略。
* やむを得ない事情はある。研究期間がわずか二年であること、著者の専門の文化人人類学は主に歴史を持たない未開民族を研究対象にすることで日本の歴史に詳しくないのは無理からぬこと、日本文化の多種多様性を念頭に置いていないこと、研究の動機が日本の戦後処理にあったことで近時の戦争での日本人の行動が印象に残ってしまったこと、その他。
* 日本の階層社会Hierarchyといっても、大名と家来の関係と大名と民衆の関係は異なる。天皇と大名・民衆との関係も異なる。庄屋・地主と村落民との関係も異なる。歴史的な由来が異なるからである。著者は歴史的な観点を欠いている。以下省略。
* 以上の各論点についての欠陥にもとづき導き出された総括的な見解はなおさら妥当ならざるものがある。忠臣蔵に表れた思想を現代人も持っていると思ったり、禅の教え、本居宣長の説や「坊ちゃん」に書かれていることが一般にゆきわたっている生活気分かのように思っている。以下省略。
* 適切な観察もある。日本に革命がなかったのは権力者が権力をふるわなかったからとか、百姓一揆は階級闘争でも制度変革を求めたものではないこと、天皇は神とされたが実際はそれに大きな意味はなかったこと、日本人の道徳の根本に恥と外聞があること、個々の人に対する個々の行為にのみ着目し、道徳の根本が立っていないことは日本人の道徳の欠陥をついている。日本人の人生観に悪と闘うという考えがないとのことは疑問であるが、キリスト教徒の観察として一つの問題提起であろう。以下省略。

1. **罪の文化と恥の文化（民俗学者・柳田國男）**

* 日本人は罪という言葉を日常的に頻繁に口にする。「罪作り」「罪な事をする」「罪のない顔」など。言葉は痕跡でしかないかもしれないが、心の中で罪を作ってはならないことが行動を導いている。その罪は法令上の罪ではない。
* 仏教の罪業観は広く徹底されている。「親をにらめばヒラメになる」「食べてすぐ寝ると牛になる」など後生のために現世の悪行を戒めることわざが多い。
* 仏教の教理が日本人の倫理とむすびついて罪の報いを恐れさせるようになった。日本人のあきらめの良さはこの世の苦しみを前世の悪行に基づくものと解して今生の行為を慎もうとした。
* 神道の罪は祓いと贖（ｱｶﾞﾅ）いによって消せるが、仏教では次の生まで持ち越すと教えられた。
* 日本の女性は罪深きものと考えられていたため、女性はさらなる罪を犯さぬことを理想としていた。
* 恥という言葉は古代では幾分か肉体的なものだった気がする。非肉体的な恥も笑われるという要素は同じ。笑いには特殊な用途があり、戦いの相手を大声で笑った方が元気を奮い起こし笑われた方はしょげ返りひるむということになる。機敏に相手の弱点を見つけてそれを笑うという技術は発達し、笑われるべき対象が身体的な欠点などに拡大した。相手の一番聞きたくないことは、無力と怯懦と過去の失敗。口の達者な者が戦場に連れていかれたとのことも伝えられている。それがいつのころか鬨の声になった。
* 笑われて平気な人はいないが、武士階級は笑われることに予め防衛を考えておく必要があった。武士の子供はこの方針で育てられ、恥をかくならば死ねと教えられた。これが、行動をいさぎよくし、意気を盛んにした。笑われる危険もなく恥を問題とする機会もない者が多数いたことも事実。たとえば、農民など。武士の恥意識が一般人に入ってきたのはずっと新しい現象である。
* 面子という言葉の心持ちを知ったのも近年のこと。面子は個人に付いて回り、外聞は集団に付いて回るもの。しかし、集団の内にあっては笑われることに対する警戒は弱い。恥の文化は新しい文化で相対的なもの。それに比べ、日本人の罪障観は中世以来強力に続いている。
* 「義理」は中国からの外来語だが、書籍の中で見ることは希であり、今日では文語としてはほとんど使われない。会話で使われるだけ。二百年以前の文芸書では道徳的な高尚な意味を持っていたが、今では葬式参列など誰でもすることだから自分もすることを意味するまで意味が変化してしまった。一つの原因は文語と口語が分かれていることにある。このように言葉の意味は時代とともに変化するが、著者はこれに気付かず「有難う」「気の毒」「すみません」の意味を解説しており、不備が見られる。
* 「恩」の意味も著しく変化している。これも外来語で対応する日本語はなかった。今でも完全には口語に溶け込んでいない。領主は土地・人の支配のために意図的に恩を制度化した。これが封建制度。そこでは、恩は道徳以上の強い力があった。足利時代以降、社会は複雑化し、上下関係だけでなく対等の人間関係にも恩が拡大適用されるようになり、意味があいまいになった。借財と同様避けられるなら避けたいものとの意味でも使われるようになった。「恩を売る」「恩に着せる」はよくない意味が含まれている。日本人は恩を受けるのを嫌うので贈答には返礼をするようになり、これが風習になった（お中元・お歳暮のことか）。
* 以下省略。

以上